手賀沼通信(第326号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

今月は弟の「私の懐かしい歌」シリーズの昨年7月に次いで続編です。

特別寄稿

「恋におちて」と「金曜日の妻たちへ」(私の懐かしい歌5) 新田自然

「東林間」の病院へ通うようになって、この「りんかん」という呼称に何となく異質な感じを受け止めていた、古くからの地名ではないような、不思議な音感である。調べてみたらかつて小田急によって開発された「林間都市構想」というものがあってできた駅の名前だと知り納得した。昔見たテレビドラマの舞台が「中央林間」であったことも思い出した。

「金曜日の妻たちへ」がTBSから放映されたのは、昭和58年(1983)のことだからずいぶん昔のことで、我が国の経済がバブル時代に差しかかるころだ。東京が膨張し郊外に多くのニュータウンが開発され、市民たちは一戸建てを求めて、都内の狭い2DKからの脱出を図ったころだ。生活も豊かになって一億総中流時代ともいわれた時代でもある。

「金曜日の妻たちへ」は東京から西の郊外のニュータウンに住む、いわゆるニューファミリーの生活様式や人間関係を描いたドラマで、テーマは不倫、従来のホームドラマになかったストーリー展開が大ヒットし、「金妻」(キンツマ)と称されるに至った。妻が熱心に見ていたので私も引き込まれたが、我々の世界ではないような、と感じながら見た記憶がある。

番組はシリーズで放映され、3年間続いた。出演者は古屋一行、小川知子、いしだあゆみ、森山良子らで、シリーズごとに話が代わり、いわゆる連続ものではない。その舞台の一つが中央林間だったのだ、甘くしょっぱい筋書きは忘れてしまったが、通勤電車で通う古屋一行が、満員電車で痴漢に間違えられないよう、手を上に持っていき

ぐさが可笑しかったのを覚えている。(その後この路線には女性専用車両ができた)

音楽も「風に吹かれて」「いちご白書をもう一度」なども採用されたようだが、なんといっても「恋におちて」が使われて最高潮に達したように思う。その作曲者か小林明子だった。曲が先にできていて湯川れい子が詞を付けた。

「恋におちて」

もしも願いが叶うなら 吐息を白いバラに変えて
逢えない日には部屋じゅうに飾りましょう 貴方を想いながら

Daring, I wont you 逢いたくて

ときめく恋に駆けだしそうなの

迷子のように立ちすくむ 私をすぐに届けて

ダイヤル回して手を止めた

I'm just a woman Fall in love (以下略)

「ダイヤル回して手を止めた」とあるが、このころ公衆電話がダイヤル式からプッシュホン式に変わりつつあった時代で、湯川は詞を変えようとしたが、担当ディレクターに止められたという、一瞬のためらいを表現するにはこの言葉をおいてほかにない。

曲は大ヒットし、海外でも制作されたという、ミリオンセラーになったともいわれる。

以下は多少自慢話のようで恐縮だが、まあ年寄りの思い出話として語らせてください。そのころ私は仙台から本社に異動となり事務管理部という部を任された。保険会社の事務部門は保険契約の計上という膨大な作業量を抱え、3事業所総勢250人の大部隊であった。大半が女子社員で、まとまりを欠いている、という指摘もあって部の一体感を作り上げるためいろいろやってみた。

会社もそのころ、社名変更し、社内一新策として、企業理念の策定、コーポレートソングの制定などを行っていた、その作曲者が小林明子さんだった。メロディは先にできていて2曲のうちから1曲を社員投票で決めた。歌詞は社内募集とされ呼びかけがあった。私はそれに乗って「みんなで応募しよう」と呼びかけたのだ。

私の呼びかけに部内は沈黙を保ったままだった。ある朝デスクの上に小林さんの曲を録音したテープが置いてあった。テープは「じゃあ貴方がやってみては？」と言っているようであった。

さて困った。作詞などやったことはないし、家に持ち帰っているいろいろな言葉を並べてみるがまとまりのない空々しい言葉の羅列にしかならない。そこで苦し紛れにそのころ制定された「企業理念」を読み込んでなんとか作り上げた。それが成功し、なんと採用されたのだ。会社から20万円の賞金が出たが、歌詞をプリントしたテレカを全員に配ったら赤字になってしまった。しかしその効果は絶大であった。

小林さんとは、詞が決まってからお会いする機会があった。小柄でチャーミングな女性だった。とてもスター性はない小柄な女性だった。

数年後、会社の合併統合があって、社名は変わってしまい、コーポレートソングは消えてしまった。その後新しくコーポレートソングが制定されたという話は聞かない、もうそんな時代ではなくなってしまったのだろう。

先日も中央林間の駅を車窓から眺めた。あの頃この街に住んだ、おしゃれな小川知子はどこへ行ってしまったのだろう。車内を見渡すと、ダークな色の外出着に着ぶくれた女性たちほぼ全員がスマホを眺めている。40年も経つと、生活スタイルも変わり、あの頃の彼女たちは都心に戻り、湾岸の高層マンションに住んでいるのか。

連絡手段もダイヤルからプッシュホンに、携帯電話、スマホに代わり、たちまちラインやSNSで情報交換ができるようになり、写真までが瞬時に送れる。

「恋におちて」は今聴いても素晴らしい曲だ、昭和という時代を後世に送る歌の一つだと思う。時代が変わってしまい、住まいに対する価値観も、生活スタイルも、家族の在り方さえも変わってし

まった。演じた人たちも去り、歌だけが残ってその時代を刻んでいる。電話がかつてはダイヤル式であったことを。

特別寄稿

荒城の月（私の懐かしい歌6） 新田自然

この歌を初めて聞いたのは何時だったかのだろうか、たぶん中学時代に教わったのだろうが、それ以前から聞いていたような気がする、それくらい懐かしみを覚える歌である。この哀調を帯びた旋律が、いつの間にか少年の心に入り込んで、歌詞の意味など分からないまま歌っていたのだろう。私が小学生だったころ戦争が終わって、歌う歌が極端に少なかったころのことだと思われる。

荒城の月 土井晩翠

- 1 春高樓の花の宴 めぐる盃影さして
千代の松が枝分け出でし 昔の光いまいずこ
- 2 秋陣營の霜の色 鳴きゆく雁の数見せて
植うる剣に照りそいし 昔の光いまいずこ
- 3 今荒城の夜半の月 変わらぬ光たがためぞ
垣に残るはただかづら 松に歌うはただあらし
- 4 天上影は変わらねど 栄枯は移る世の姿
映さんとてか今もなお 嗚呼荒城のよわの月

解説によると、明治34年(1901)東京音楽学校が中学唱歌として発表したもので、歌詞を土井晩翠に依頼、作曲は懸賞募集され、滝廉太郎の曲が採用されたものであると。漢詩調で七五調の格調高い詞につけられた、もの悲しくも雄渾なメロディは、我が国を代表する名歌となった。わが国初の西洋音楽(いわゆるヨナ抜き音階でない)であって、いま歌われている歌唱曲は滝廉太郎の死後、山田耕筰によって編曲されたものが歌われているものとある。

作詞時の晩翠28才、東京帝国大学を卒業してなおお大学院に残り、中学校の教壇にも立っていた。すでに詩集を刊行し詩人としての名を馳せてもいた。

詞の意味を理解することなく歌ってきたが、難解で結構深い意味が含まれているようだ。晩翠は詞について「最初に浮かんだのは会津鶴ヶ城であ

った」と述べたようだが、仙台出身の彼にとって、まず浮かんだのは「仙台城（青葉城）」ではなかったか。作詞の経緯については詳しく述べていないので、いろいろ後付けの解説がなされているが、容易に想像できるのは、東北人にとっての「城」は、戊辰の役で破壊され、さらに廃城令などにより改修もされず放置されたままの城で、わが国が辿ってきた近世の歴史の悲劇的象徴であったと思われるのだ。城山にある伊達政宗像の傍に荒城の月歌碑が建っている。歌碑除幕式において、晩翠先生は感極まって涙したといわれる。

わが晩年の師赤根祥道先生は戦後の東北大学に学ばれ晩翠先生の教えを受けた。戦災で3万冊の蔵書を焼失し気落ちしている晩翠先生に、赤根青年はせせと食料品を届けるなど生活支援に努力した。晩翠先生は7年後に亡くなった。

城下町で育った市民にとって、城山は目を閉じても浮かぶ故郷のシンボルでもある。松山で育った私も松山城を「お城」と呼んで畏敬をもって見上げていた。正岡子規もそれは同じで、子規は城を見上げながら多くの俳句を作った。多くの俳人がいるが子規が一番多い。

春や昔十五万石の城下かな 子規

かつて私も仙台に住んだことがあるが、仙台城（青葉城）は市民にとってなによりの誇りであった。仙台城下の商家に生まれた土井晩翠にとっても思いは同じであった。詞の依頼を受けてまず浮かんだのは仙台城、仙台平野のほぼ中央、青葉山に築かれたこの城は、伊達政宗の築城になる名城である。

そして次に浮かんだのが会津若松城（鶴ヶ城）だ、不本意な朝敵の汚名を着せられた戊辰戦役で完膚なきまでに破壊され、廃城は免れたものの哀れな姿をさらしている。

さらに晩翠が思いを寄せたのが富山城だ。尊敬する上杉謙信の漢詩が浮かんできた。悠久の月光は、それらの城や歴史の上にも注いでいる、その姿を描こうと晩翠は構想したに違いない、四節編成の、起承転結の構成にしようと考えた。

一番は春の宵、城郭の上で催される花見の宴、武士たちが回し飲みする盃に、千代の松の枝越し

に月影が映しだされている。正宗は仙台城がかつては「千代城」と呼ばれていたのを「仙台城」に書き換えた。街から見上げると、ほどよい高さの城郭で、花見の宴が見えるようではないか。

二番は秋の戦場としての城郭だ。戦いの陣営にみなぎる肅気の上を行く数行の雁、守りを固めた石垣に植え込まれた刀身や穂先に月の光が注ぐ。政府軍に対峙する鶴ヶ城の城内はこのような戦の場でもあったのだ。描くにあたって晩翠にひらめいたのは、上杉謙信の漢詩ではなかったか、七言絶句の漢詩にこの詞が重なっている。

九月十三夜陣中作

しもはぐんえいにみちてしゅうきよし さうこうのかがんつきさんこう
霜満軍営秋気清 数行過雁月三更

えつざんあわせえたりのうしゅうのけい さもあらぼあれかきょうえんせいをおもうを
越山併得能州景 遮莫家郷憶遠征

晩翠は尊敬する上杉謙信の詩をオマージュとして登場させたのだろう。「植うる剣」には諸説あるが、陣営にみなぎる肅々とした気配としてみた場合、戦いの場としての動きは停止している。春秋は時の流れだ、華やかな時もあれば、厳しい戦の場ともなる。いずれも過ぎた日々の光だ、そのような日々はどこへ行ってしまったか。

三番は、ひるがえって今、無情にも荒れ城となった城壁には葛蔓が生い茂り、老いさらばえた松には風が吹きすさび、月はその上にただ光を降り注いでいるのみだ。

四番はそれらを慨嘆し、月光は変わらないが、地上ではなお栄枯盛衰が繰り返されている。それらを映して降り注ぐ月の光、生者必滅世の習い、これは未来の無常でもあると結ぶ。

当時の我が国の音楽教育は貧困で、先進国の歌（メロディ）を輸入して、それに適当な歌詞をつけて歌わせるだけの状態で、日本人による日本の歌を作ることが喫緊の課題とされ、十数曲の詞が提示され懸賞募集が行われた。一人3曲までの応募で懸賞金は5円とされた。

滝廉太郎がこれに応じ3曲すべてが採用となった。「荒城の月」のほか「箱根八里」「豊太閤」である、豊太閤は知らないが「箱根八里」はいまでも親しく歌われている。このころ彼は「花」「お正月」「雪やこんこ」など、現代に残る曲を作曲して

いる。得た賞金は家族のために使ったそうである。

この晩翠より 8 才下の青年は東京生まれ、父親の関係で富山や大分の竹田に岡城址を見上げながら育った。明治 27 年(1894 年)に東京音楽学校を卒業していた。これらの成果を経て明治 34 年(1901 年)ドイツ留学を認められ、かの地で不幸にも肺結核を発症、翌年帰国、その翌年に死亡した。天才青年の凝縮した 23 年であった。

廉太郎は死の床で「お母さん私には自分の寿命がよくわかる、あの「荒城の月」が歌われる限り、まぼろしの岡城址とともに(私のことも)思い出されるでしょう」と言って亡くなったそうだ。それだけの自信作であった。そのいかにも早い死が悔やまれてならない。生きておれば、我が国は第二の国歌を持ちえたかもしれない、「モルダウ」や「フィンランディア」あるいは「美しき青きドナウ」のように。

このような名曲が現代の教育制度の中にどのように受け継がれているか、はなはだ心もとない気がして息子一家に訊いてみた。息子は 50 代、妻 40 代、長男 20 代、次男 10 代(大学生)、長女 10 代(中学生)である。結果は長男までは教えられ承知しているが、次男以下は知らないし聴いたこともないという。これでもって音楽教育の現状をうんぬんするつもりはないが、なんとなくそうではないかという私の危惧が現れてきたような気がした。

以下は少し書き過ぎの感があるがあえて書く。

時代の変遷があって明治期に作られた歌の意がわからなくなり、しだいに歌われなくなった歌が多いが、難解であってもよい歌は残されるべきである。わが国の国歌「君が代」でさえ意味を知らないで歌っている人がいるなかで、残されるためには繰り返し歌い続けること、さらにはわが国の歴史や文化についての再教育が必要であると思うのだ。バックボーンの抜けきった国民に、もう一度国とは何かを問い直し、力を与える意味でも喫緊の課題であると思っている。

その意味でも「荒城の月」は記憶され、歌い続けていくべき名歌である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

私の好きな 3 つの歌番組

カラオケに行けなくなったため、歌はもっぱら聴いて楽しんでます。

歌番組は今はBS放送で放映されることが多く、演歌番組はありますが民謡はありません。民謡はたまにNHKの総合テレビで放送されるくらいです。

私が好きな歌番組は次の 3 つです。

必ず録画して見えています。録画で見れば、コマーシャルや、知らない歌や、好きでない歌手の歌などを早送り飛ばしながら見られるからです。

「BS新日本の歌」(NHKBS 日曜日 19時30分より)

毎回各地の会場を移動しながら、放送される 1 時間半の番組です。

9～10 人の歌手またはグループが出演、演歌が主体です。懐かしい歌と、毎回テーマを変えた「スペシャルステージ」の歌、それと新曲を歌います。

開催地の名所の情報を知ることができます。

「こころの歌」(BS日テレ 月曜日 20時より)

男女のコーラスグループ「FORESTA」の合唱で構成された番組で、観客はありません。

毎回テーマを決め、テーマに合わせた歌のコーラスです。伴奏はピアノだけ、司会者やゲストはいません。歌をシンプルに楽しむことができます。

唄のジャンルは、愛唱歌、小学唱歌、歌謡曲、演歌、ポップス、民謡、など多岐にわたっています。

歌番組は 1 番と 3 番の部分が唄われることが多いのですが、この番組は 2 番を省略することなくフルコーラスで唄われます。コマーシャルも決まった 1 社だけ、こころ静かに楽しめます。

「武田鉄矢の昭和は輝いていた」(BSテレ東 金曜日 20時より)

武田鉄矢がMCを務め、ゲスト数人と昭和の何かをテーマとして進められる番組です。歌とおしゃべりで構成されています。

歌われる唄も昭和の歌が主体です。歌の数はそんなに多くはありません。

(新田良昭)